

主体的に学び合う複式教育

～場の工夫による対話の深まりをめざして～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

今年度の学校提案は、「学びの質の高まりをめざして」であり、サブテーマとして『吟味を生み出す対話』をつくる」としている。「学び」は対象・他者・自己と対話することで成熟していく三位一体の活動である。子どもたちが三位一体の対話の中に対象の本質や価値・真理などに迫るための吟味を生み出すことによって、学びの質の高まりをめざそうとしている。

複式という少人数異学年の形態を研究する観点から「他者との対話」に絞って研究することが有効であると考え。その対話が深まるようにすることが、学校提案サブテーマにもある「吟味を生み出す対話」にもつながると考える。

昨年度の複式提案は「主体的に学び合う複式教育～対話が深まる場の設定をめざして～」であった。しかし、ペア学習やグループ学習、異学年グループなど、学びの形態に偏ってしまうという反省点があった。今年度、複式部の考える「場」とは、学びの形態としての「場」だけでなく、子どもたちがしっかり自分の意見を持ち、自由に発言できるクラスの雰囲気も含めたものである。

複式学級の特徴として「少人数」があげられる。

- ① 教師を含め一人ひとりの人間関係を密にすることができ、子どもたちにとって安心できる。
- ② 長期間同じメンバーで過ごすため、意見が通る子、黙ってしまう子など授業中での立場が決まってしまう。
- ③ 多様な意見が出にくい。

そこで、子どもたちが自由に話せたり、その話し合いから新しい考えを生み出せたりする場の工夫をしていきたい。つまり、場の工夫をすることで対話をさらに深め、新たな認め合う関係が生まれると考えたのである。

また、もう一つの「異学年」という特徴では、「他者」の中に違う学年の友だちがいることで、子どもたちの姿勢に次のような効果があらわれる。

- ① 上学年の子どもたちは、下学年の子どもたちのお世話をしたり、面倒を見たり、教えてあげたりする。ときには下からのプレッシャーを感じ、いつも以上にがんばろうとする。
- ② 下学年の子どもたちは、上学年の子どもたちを目標にしたり、あこがれたり、役に立とうしたりと、必死になって追いつこうと努力する。
- ③ 下学年から上学年になることにより、下学年のときにしてもらったことを上学年になって自然と真似をして下学年に返していく。
- ④ 上学年から下学年になることにより、また新たな上学年という目標ができ、さらに成長しようとする意欲を自然と持つことができる。

「異学年」という特徴から、「他者との対話」の幅をひろげられるという利点を活かしていきたい。

(2) 複式部でめざす子ども像

複式学級は、1時間の授業で直接指導と間接指導がある。そのため特に間接指導において、子どもたちが自分たちで授業を進め、自分たちで課題を解決していき、自分たちで次の課題を見つける意欲や行動力が要求される。そこには子ども一人だけではできない、「協同」の場での主体的な学び合いが必要になる。より深いかわりの中で、友だちを認める寛容さと友だちに要求する厳しさ、友だちの要求に応えようとする誠実さがあるからこそ、意欲や行動力が表出してくるの

である。そんな友だち同士の「協同」の場での主体的な学び合いができる子というのが、複式部でめざす子ども像となる。

そこで、複式部では、本年度の研究テーマを「主体的に学び合う複式教育～場の工夫による対話の深まりをめざして～」と設定した。

2. 複式教育における「学びの質の高まり」

複式教育における「学びの質の高まり」とは、子どもたちが、感じたことや考えたことを話し、相手の考えを聞き、そこに自分の考えを加えて伝える。そして、それを自分たちで意欲的に繰り返すことで課題を解決していこうとする状態のことだと考える。

「少人数」・「異学年」という複式学級の特徴から、より濃密な対話や異学年との対話が可能である。その特徴を活かして、質の高い学びを成立させることが、複式教育のめざすところである。

3. 研究の展望

複式の授業では、子どもたちが司会や記録などの技能をもたなくてはならない。しかし、それはすぐにうまくできるものではない。それぞれの学年に合った経験を積み重ねることによって身に付いていくものである。話す・聞く態度や司会や記録の技能として、発達段階を考慮した具体的な目標をもち段階的に力を付けていけるよう指導していきたい。

	話す・聞く	司会	記録
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなに聞こえるような声の大きさと自分の意見を話す。 ・話し手を見ながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・司会者として自覚を持つ。 ・偏りなく指名できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見やすい大きさの文字で記録できる。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・似た点や違いを考えながら自分の意見を話す。 ・自分の意見と比べながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・似た意見や違う意見を整理しながら、課題に沿った進行ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大切な意見がわかるように考えながら記録できる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・視点や論点の広がりやずれを意識し、整理しながら話す。 ・話し手の意図を捉え、自分の意見と比べながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場や状況を考え、自ら応じ返したり問いかけたりできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見を取捨選択し、必要な内容を関連づけながら記録できる。

また、昨年度に引き続き、形態としての場の工夫も行っていきたい。①個人での学びの形態 ②同学年ペアでの学びの形態 ③同学年4人グループでの学びの形態 ④異学年ペアでの学びの形態 ⑤異学年4人グループでの学びの形態 ⑥1個学年別全体学びの形態 ⑦2個学年全体の学びの形などの場を設定することができる。学年や教科、教材・題材、各単元によって、どの形態において対話が深まりやすいのかを探っていく。

4. 研究の評価

研究の検証方法としては、同時に2つ以上の「場の工夫」を行うことは不可能である。したがって、類似した教材・題材や単元で、違う形態を試行することで比較するほかない。ビデオや録音、授業記録、子どもの書いた文章などでしっかり記録を取り比較する。また比較する場合、大きく見るのではなく、できるだけ細やかなみとりを大切に、検討できるようにする。